

本との話

松尾真規子
東海大学健康科学部

精神病といふこころ 松木邦裕 著
どのようにして起こりいかに対応するか

閉鎖病棟 帝木蓬生 著

精神病のこころの世界を理解する

■『精神病といふこころ』
子どもを育てるようになって、いかに育児と精神看護の間に共通点が多いかに気づかれる毎日だが、それを人に話したところ一笑に付されたことがある。(しかし、この本に記されているように、対象問答論を用いて説明ができるいたら、おそらく説得力があつただろうと思う。)

例えば、本書では、極端の精神病状態にあり、破滅の感覚や不安に怯えている人たちへの対応に際して、「泣き叫ぶ生まれてまもない赤ん坊を世話をしているお母さん」をモデルとして提示している。そこでは、患者と赤ん坊の共通点として言葉にできない不安や苦しみを抱っており、安全性和世話を提供が必要と述べている。つまり、温かく包み込むような態度、物理的に安全な環境、こころを安定させる栄養(向精神薬)、清潔さや保

活、十分な睡眠や生活の規則性の提供などである(これらはまさに看護の基本である!)。

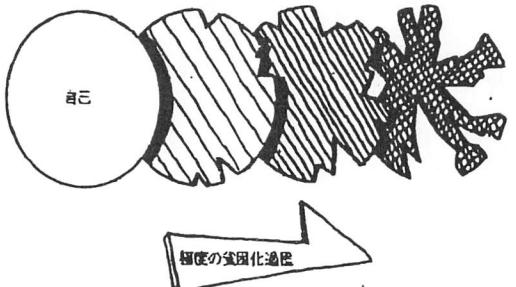
本書では、精神病に見られる舌の体験の原因が、生後まもない赤ん坊が成長していく過程にほとんどそのまま見られると考えられている。つまり、程度の差こそあれ、実は私たち誰もがそれらの不安を体験してきているのであるが、何とかそれをやり過ごすことができて、何らかの大きな負荷がかかつてきたり、それが心にあふれ出し、精神病体験が始まってしまうというのである。

私は日頃、学生実習を担当しているなかで、学生から「どこまで

が普通でどこからが病気なのどうか」という疑問をよく投げかけられる。自分が、自分の心の奥底にある傷や不安がよみがえることによって涙を流され、病院で接する患者たちとわれわれが全く別個の種類の人間ではなく、同じ連続線上にいることに気づくのは当然のことともいえる。

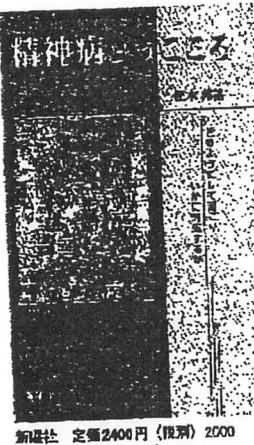
私は対象関係論については全く不勉強なのだが、本書は精神病の人の心の世界を理解するのに非常に役立つと感じた。

例えば、慢性期の精神分裂病では症状が進行すると「人格が崩壊する」といわれているが、私にはいまひとつその意味が理解できな



(精神病といふこころ p.188より)

まつきまさこ 東海大学健康科学部
看護学科助手 T259-1193
伊勢原市立看護台



温かな視点で描かれる
精神病院の日常と問題点

■『閉鎖病棟』

この名著をいまさらながら紹介するのは、今年この小説が「いのちの洞」というタイトルで映画化されたからである。小説に忠実に描かれているが、入院患者が別に患者を刺殺するという場面がクライマックスとなっており、映画公開については精神病患者の偏見につながらないか、全虫眼鏡看護者家族会連合会などで物議をかもしたそうである。

私がこの小説を好きなのは、先に紹介した『精神病といふこころ』の松木邦裕氏同様、作者であり精神科医である帝木蓬生氏の、患者に対する温かな視点を感じられるからである。精神病院での日常が

かかった。本書には、自分が壊れてしまう不安を和らげようとしてスプリット(断片化)や排出(投射)が、系統立てて構造化された妄想として繰り返され、その結果どんどん自己が削り取られ、自我の貧困化が進み、まるで虫食い状態になると記されており(因參観)、ようやくイメージ化できた。

その状態に至るプロセスや患者の体験する恐れがながましく表現され、それが精神科医としての著者の豊かな臨床体験に基づかれたものであることにより、非常に説得力を持って読者に理解をもたらし、さらには精神病患者の体験のせつなさや、著者の患者に対するかかわりのなかに温かささえ感じさせてくれるのである。

同じ著による前著『対象関係論を学ぶ』(岩崎学術出版社、1996)よりさらにわかりやすく、豊富な事例と平易な文章で書かれているので、学生や私を含めた初心者にとっても学ぶ助けとなるであろう。



もう冬ですね...

新刊『脳でねおせらむにうりうり』

1/19

01年11月 7日 (木) 5:44 PM マツキヒロ K.MATSUKI

FAX番号: 0924341708

P. 2